

スリランカの日本語教育の現状

Samanthika Lokugamage
International Center for Multidisciplinary Studies
Department of Languages, Cultural Studies and Performing Arts,
Faculty of Humanities and Social Sciences,
University of Sri Jayewardenepura

1. 背景

井上（1997）によると、1967年にコロombo市内で始まった私塾がスリランカの日本語教育の始まりである。それが1975年に日本大使館日本語普及講座として受け継がれた。高等教育における日本語教育は、1978年に課外コース、1980年に学位取得コースとしてケラニヤ大学で開講された。1979年にG. C. E. (A/L) 試験¹の1科目として学校教育の中に取り入れられ、さらに、G. C. E. (O/L) 試験²の選択科目に日本語が導入され、2001年に第1回の試験が実施された。今では初等・中等教育、高等教育、そして学校教育以外でも日本語が教えられている。高等教育の場合、全17の公立大学の内、ケラニヤ大学、サバラガムワ大学、ラジャラタ大学、スリジャヤワルダナプラ大学の4校で日本語の学位が提供されている。その他に8校の大学で選択科目やセーティフィケートコース等で日本語が教えられている。学校教育以外では首都のコロンボ周辺だけでも、10機関以上で日本語教育が行われ、コロンボ以外の地域では、ガムパハ、キャンディー、クルネーガラ、ラトナプラ、パーナドゥラ、ゴールといった主な都市に大規模な日本語教育機関が設立されている。

日本語教育年表

年	顕著事件
1967年	コロombo市内の私塾で日本語教育が開始される
1975年	日本大使館日本語普及講座として受け継がれる
1978年	ケラニヤ大学で日本語の課外コース開講
1979年	G. C. E. (A/L) 試験の1科目として学校教育の中に日本語を導入
1980年	ケラニヤ大学で日本語の学位取得コース開講
1994年	大使館日本語講座が民営化（スリランカ日本語教育協会附属日本語講座）
1996年	サバラガムワ大学で日本語の学位取得コース開講
2001年	G. C. E. (O/L) 試験の選択科目に日本語を採用
2013年	ラジャラタ大学で日本語講座開講 ペラデニア大学にスリランカ日本研究センターを設立
2016年	ケラニヤ大学に日本学研究センターを設立
2022年	スリジャヤワルダナプラ大学で日本語の学位取得コース開講

表 1

¹ General Certificate of Education (Advanced Level) の略語。これはスリランカの高校卒業兼大学入学用の国家試験であり、文部省の Department of Examinations によって行われる。

² General Certificate of Education (Ordinary Level) の略語。これはスリランカの中学卒業兼高校入学用の国家試験であり、文部省の Department of Examinations によって行われる。

2. 日本語教育の現状

2. 1. 南アジア諸国との比較

国際交流基金の『2022 年海外日本語教育機関調査』によるとスリランカの日本語学習者数は調査の時点で9,746人であり、2018年の調査結果で分かった学習者数の8,454人から増えている。南アジア地域の他の国に比べると人口の割に日本語の学習者が最も多い国はスリランカだと言えよう。そして、中等教育で日本語を学んでいる人数が最も多いのはスリランカで、他の国ではやはり学校教育以外を中心に日本語教育が実施されていることが分かる。

表 2-3-1 南アジアにおける機関数・教師数・学習者数

(2021年度の学習者数順)

国・地域	2021年度								人口 (人)	2018年度		
	機関 (機関)	教師 (人)	学習者 (人)	10万人あたりの学習者 (人)	教育段階の構成(学習者)(人)					機関 (機関)	教師 (人)	学習者 (人)
					初等教育	中等教育	高等教育	学校教育以外				
インド	323	1,132	36,015	3.0	2,296	4,439	8,525	20,755	1,210,854,977	304	1,006	38,100
スリランカ	89	164	9,746	47.9	0	6,412	833	2,501	20,359,439	77	125	8,454
ネパール	241	812	9,646	36.4	0	150	215	9,281	26,494,504	126	443	5,326
バングラデシュ	116	346	7,418	5.1	266	112	925	6,115	144,043,697	85	220	4,801
パキスタン	5	13	243	0.1	0	0	90	153	207,774,520	8	16	587
ブータン	1	3	18	2.5	0	0	0	18	727,145	2	8	48
モルディブ	1	1	7	1.7	0	0	7	0	402,071	2	2	40
南アジア全体	776	2,471	63,093	-	2,562	11,113	10,595	38,823	-	604	1,820	57,356

※人口は国際連合発表のPopulation and Vital Statistics Report (as of 3 June 2022) より引用

表 2

2. 2. スリランカの日本語学習者

国際交流基金の『2022 年海外日本語教育機関調査』のデータでは日本語教育機関、教師、そして学習者の数は次のようになっている。

機関数	教師数	学習者数※
89	164	9,746

表 3

※学習者数の内訳

教育機関の種別	人数	割合
初等教育	0	0.0%
中等教育	6,412	65.8%
高等教育	833	8.5%
学校教育以外	2,501	25.7%
合計	9,746	100%

表 4

以上の表でも明確なように 2022 年の時点では日本語学習者が多いのは中等教育である。では中等教育における語学教育の中に日本語がどのように位置づけられるのだろうか。2023（2024）年の G. C. E. (A/L) 試験の受験者と成績状況をまとめたスリランカの文部省の統計データ（表 5）で分かるように、高校卒業兼大学入学用の国家試験に語学を受験した学生の中で公用語であるシンハラ語、タミル語に並んで日本語は 3 番目に受験生が多い科目になる。（表に挙げられている英語とは英文学であり、それとは別に必須科目としてコミュニケーションのための英語は全員受けることになっている。その数はここに上がっていない）

Table 14: G.C.E.(A.L.) Examination - 2023(2024)
All Candidates - Results by Grades in Each Subject

Subject No.			Subject	No. Sat	A		B		C		S		(A+B+C+S)		F	
					No.	%	No.	%	No.	%	No.	%	No.	%	No.	%
49	71	Sinhala		51,892	7,769	14.97	11,044	21.28	15,169	29.23	11,659	22.47	45,641	87.95	6,251	12.05
50	72	Tamil		18,097	1,602	8.85	3,310	18.29	6,143	33.94	4,747	26.23	15,802	87.32	2,295	12.68
51	73	English		1,499	3	0.20	37	2.47	287	19.15	610	40.69	937	62.51	562	37.49
52	74	Pali		1,130	128	11.33	165	14.60	318	28.14	363	32.12	974	86.19	156	13.81
53	75	Sanskrit		586	48	8.19	82	13.99	165	28.16	206	35.15	501	85.49	85	14.51
54	78	Arabic		1,798	453	25.19	394	21.91	533	29.64	317	17.63	1,697	94.38	101	5.62
55	79	Malay		4	3	75	0	0	0	0	0	0.00	3	75	1	25.00
56	81	French		933	103	11.04	118	12.65	211	22.62	228	24.44	660	70.74	273	29.26
57	82	German		289	35	12.11	28	9.69	70	24.22	73	25.26	206	71.28	83	28.72
58	83	Russian		43	2	4.65	4	9.30	17	39.53	11	25.58	34	79.07	9	20.93
59	84	Hindi		314	17	5.41	29	9.24	90	28.66	119	37.90	255	81.21	59	18.79
60	86	Chinese		366	80	21.86	58	15.85	102	27.87	68	18.58	308	84.15	58	15.85
61	87	Japanese		2,285	162	7.09	217	9.50	399	17.46	716	31.33	1,494	65.38	791	34.62
62	88	Korean		434	93	21.43	56	12.90	81	18.66	77	17.74	307	70.74	127	29.26

表 5

学校教育のデータから分かるように日本語がスリランカの公用語のシンハラ語とタミル語、そして結合語（link language）の英語³以外では最も広く教えられていることばである。それでは、学校教育以外の日本語教育がどうなっているのだろうか。以上の表 2 に注目してみる限り、南アジアの他の国では学校教育以外の学習者数が圧倒的に多く、スリランカのみ日本の教育が学校教育に集中されていると言えよう。2019 年からスリランカ人は特定技能実習生（SSW）として日本に行けるようになったことで、今後スリランカでも学校教育以外での学習者の増加が予想できるが、国際交流基金の 2022 年の報告書ではまだその数は反映されていないと考えられる。この調査自体は 3 年ごとに行われており、2025 年の報告書では最新情報が分かるのである。

表 6 は Lokugamage, 2024 に表示されている大学と学校以外の教育機関を中心に、3 校の大学と 4 校の語学学校の日本語学習者数を性別にまとめたもので、これでは学校以外の教育で男子学習者が多いことが目立つ。日本語教育に関わるジェンダーの影響を目的とする研究であるため、ここではすべての大学とすべての教育機関を調査しているわけではない。

	Public Universities	Private Institutions
Male	29 (7%)	1187 (70%)
Female	368 (93%)	461 (30%)

* All learners are school leavers aged 18 and above

* The number of learners was taken from on-going courses at the time of data collection.

表 6

³ Gunsekera (2005) によると 1987 年の憲法の修正条項 13 でシンハラ語とタミル語を公用語、英語を結合語とすることに決められた。

表 7 は Lokugamage, 2024 に挙げられている日本語能力試験の受験者を性別に分けた統計データであるが、ここで強調されているのは N5 と N4 レベルを受ける男子の数が他のレベルに比べて女子の数との差がわずかしかなことから、やはり特定技能実習制度に興味を持った N4 と N5 レベルの試験を受けている男子が多いと考えられる。

Level	Female	Male	Total
N1	37 (86%)	6 (14%)	43
N2	121 (80%)	30 (20%)	151
N3	418 (85%)	76 (15%)	494
N4	2966 (52%)	2695 (48%)	5661
N5	3356 (50%)	3403 (50%)	6759
Total	6898 (53%)	6210 (47%)	13108

Figure 3: JLPT 2023 July

Source: (JLPT Registration Portal, 2023)

表 7

Level	Female	Male	Total
N1	38 (81%)	9 (19%)	47
N2	154(86%)	25(14%)	179
N3	382(77%)	116 (23%)	498
N4	2295 (55%)	1913 (45%)	4207
N5	2826 (57%)	2171(43%)	4997
Total	5695 (57%)	4233 (43%)	9928

Figure 4: JLPT 2023 December

Source: (JLPT Registration Portal, 2023)

表 8

そこで、以下 1. 3 ではスリランカ人日本語学習者の学習目的に注目を当てることにする。

3. 学習目的

以上のようなことで日本語が比較的に人気度の高い言葉であることが言える。なぜ日本語がこれだけ注目されているのであろうか。高等教育における日本語学習のモチベーションに注目する De Silva, (2015) では「日本語が好き」、「伝統文化も現代文化も好き」などという理由で日本語が学習したがる人が多いと述べられている。また Deldeniya (2018) 中等教育の日本語学習の意欲に注目して「日本語が好き」、「日本文化と日本人が好き」、「日本語を教えている先生が好き」などの理由で中学校・高校で日本語を学習する人が多いと述べている。Lokugamage (2022) は日本語学習者を対象にグーグルフォームを通してなぜ日本語を勉強しているのかを調査した結果、回答者の多くの学習者は「日本に行きたいから」、「日本語が好きだから」、「日本文化が好きだから」、「日本のアニメが好きだから」等の理由で日本語を学習していると述べている。

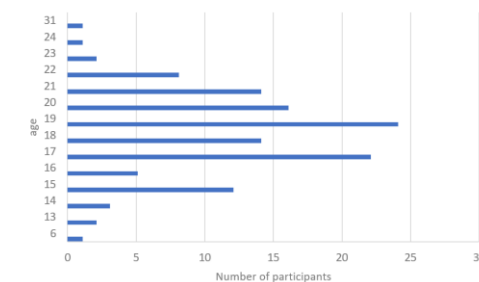


図 1

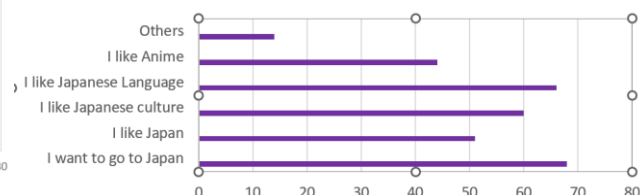


図 2

以上の調査に協力してくれた学習者の年齢は図 2 に示す通りで、最も多かったのは 19 歳つまり、高校の日本語学習者である。二番目に多いのは 17 歳でそれもやはり中学卒業や高校一年生、つまりこの調査で分かるのも学校教育内の年齢層の日本語学習の目的である。

4. 技能実習性 (SSW)

2019 年からスリランカからの技能実習生が受け入れ開始となったため、学校以外の機関における日本語教育に注目されるようになってきている。その結果として日本語教育機関の増加、日本語教師採用の増加、教師養成プログラムの開催などがみられる。

国際交流基金の日本語専門家を中心に技能実習生に日本語を教える教師のワークショップがケラニヤ大学などで頻繁に行われたり、国際交流基金が日本で行われる技能実習生用日本語の教師研修プ

プログラムにスリランカの日本語教師も参加させたりするような動きから今後学校教育以外では技能実習生を中心となった日本語教育が大きく成長していくことが予想できる。

5. 専門家向けの日本語

以前から社会の日本語教育のニーズとしてあるもう一つは留学生向けの日本語講座やエンジニア、IT 関係の技術者、自然科学や人文社会学関係の専門家が日本で進学したり、専門職や研究を続けるためのサポートになる日本語教育である。それはやはり技能実習生向けの日本語と違い、日本語能力試験のN3以上の日本語知識が求められるため、比較的長い時間がかかる。また、対象者は既にスリランカで専門職に就いていたり、大学などで勤めたりしていることもあって、勉強できる時間は限られているが、学歴が高いため、時間さえあれば授業に付いていけるという技能実習生と違う特徴を持っている。そういった学習者を対象にしている教育機関として LMBTI 等（以下詳しく述べる）が挙げられる。

6. スリランカの日本語教育の課題

スリランカの日本語教育の課題として大きくみられるのはまず中等教育における日本語学習の目的にあるだろう。多くの場合、日本や日本文化が好きだから日本語を勉強する学習者は多いが、それは日本語を習い始めるきっかけであっても、初級レベルが終わるところにはもうちょっと目的が明確になったらもっと合理的に勉強ができるだろう。日本に行って何ができるのかイメージできないのはその大きな理由だと思われるが、やはり日本語教育ではそのイメージを育てていく必要がある。また日本の文化が好きだと言っても、あまりにも漠然としていて、よく聞いてみれば何が好きなかははっきり返事が返ってこないのである。

技能実習生向けの日本語教師養成プログラムが増えているが、技能実習生に求められるのはこれまでの日本語教育と違って日常的にコミュニケーションができるレベルの日本語であって、流暢な日本語でコミュニケーションができることではない。技能実習生向けの日本語だけに注目するのではなく、やはり専門家向けの日本語も両立して発展させていく必要がある。

参考文献

国際交流基金の『2022 年海外日本語教育機関調査』くろしお出版

<https://www.ipf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2022/srilanka.html#KEKKA>

2025. 01. 15 参照

De Silva (2015a). Language Learning Motivation: A Case Study of Sri Lankan JFL Students in the University Level. *Gengoshakai* 9, 432-418.

Deldeniya, M., Kahatibi, A., Azam, S. (2018). An Analysis of Students' Motivation and Attitudes Toward Learning Japanese Language as a Foreign Language in Secondary Schools in Sri Lanka. *European Journal of Foreign Language Teaching*, 11-24.

G. C. E. (A/L) Examination Performance by the Candidates 2023(2024). Education publication.

Inoue, A. (1999). Suriranka ni okeru nihongo kyoiku no genjo to kadai. *Sekai no Nihongo Kyoiku-Nihongo Kyoko Jijo Hokokuhen*, 5, 137-153.

Lokugamage, S. (2023/10). "Language Education and Gender: Focusing on Japanese Language Education in Sri Lanka" paper read at -International Research Conference on Gender Studies – 2023 "Towards a Society of Equal Opportunity" at University of Sri Jayewardenepura, Sri Lanka.

Lokugamage, S. (2022). Case Study of the Influence of Anime on Japanese Learners in Sri Lanka. In Karunaratne, H. (Ed.), *Odyssey of Partnership 70 Years of Japan- Sri Lanka Relations*, (pp 327-351). The University of Colombo Press.

